

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 鄭 祥教

仏教は、実体としての人格主体の存在を否定する「無我」なる思想を説く一方、行為の結果を帰属させるべき主体が不在になることで、修行の実践や努力の意味を消失させてしまう危険を回避するため、さまざまな理論を模索してきた。その結果、「心相続」や「識転変」という、人格とは異なる何ものかの存在を認める説一切有部や唯識学派と、そうした存在を認めない中観学派とに、存在論的な立場は二分された。本論文は、これら二つの大きな流れのなかであって、いずれの側からも異端として批判されながら、仏教思想史に長期にわたって大きな影響を与えた「プトガラ（人格）説」に注目し、中観学派からの批判を通して、その思想の解明をめざした労作である。

論文は、研究史を整理した序論につづき、「蘊と別異のプトガラ」「蘊と同一のプトガラ」「蘊即我、心即我のプトガラ」「非即非離蘊のプトガラ」「撰真実論」「撰真実論細疏」のプトガラ」という、5章立ての構成を取る。結論につづく付篇には、根拠としたすべての資料のサンスクリット語テキスト、チベット語テキスト、和訳が提示され、ことに『撰真実論』『撰真実論細疏』については、あらたな写本を用いて公刊済みのテキストをさまざまに修正しつつ、有益な資料を提示している。

犢子部あるいは正量部とよばれる学派が主張したといわれるプトガラ説は、時代と系統を異にする諸学派のさまざまな批判のなかに断片的に現れるにすぎないため、その全体像を知るには、諸処に散説される諸説をていねいに回収しつつ、批判者の言説から当該の学説を再構成し、それらを時代と文脈の相違を考慮して整理するという、複雑な手続きを経なければならない。本論文は、無我説をもっともラディカルに継承したとみられる中観学派の主要文献である『中論』（2-3世紀）、『般若灯論』『中観心論』『思釈炎』（6世紀）、『般若灯論復注』『入中論』（7世紀）、『撰真実論』『撰真実論細疏』（8世紀）、『入中論復注』（11世紀）という関連文献の全体を対象としつつ、関連記述を網羅的に回収して分析し、これまで「非即非離蘊」とのみ解釈されてきたプトガラ説が、「蘊即我」や「心即我」説を同時に包摂する、複雑な体系をなすものであることを明らかにした。これは正量部のプトガラ説をはじめ総体として提示しえた大きな貢献である。

細部にわたれば、今後の解明に待つべき問題が残されているものの、中観派からみた正量部のプトガラ論について、全体的な見通しを与えた貢献は大きい。以上の根拠をもって、本審査委員会は、本論文を、博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断する。